

【鴨川市の農林業】

鴨川の農業は、古くから基幹的な産業として、恵まれた気候風土のもとに稲作、畜産、花き栽培を中心に発展してきました。

近年は、農村部でのグリーンツーリズムが積極的に行われ、都市との交流により農村環境の維持保全、活性化に大きな成果が見え始めています。

しかしながら、農村部での過疎化の進行に伴う離農や遊休農地の増加、農業所得の減少、加えて山間部を中心にシカ・イノシシなど、平野部でもキョンやハクビシンなどの有害鳥獣の増殖に伴う農作物の被害が深刻になっています。

◇水 稲

鴨川の農業は、古くから水稻を中心とした経営形態で、経営耕地面積 1,325ha の約9割（1,234ha）が田という比率をみても水稻が農業の根幹にあることがわかれると思います。

特に市中央部を横断する「加茂川」流域を中心とした「長狭平野」は、市内でも有数の米どころであり、江戸時代から良質米の産地として知られ、天皇献上米としての歴史もあります。また、平成3年2月、全国農協中央会（日本の米づくり100選中央審査会）により、「日本の米づくり100選」に選定され、県内からは「長狭米」と「多古米」が選ばれています。水稻の品種については、コシヒカリを中心にふさおとめ、ひとめぼれ、ふさこがね等も作付けられ、市全域で約1,200ha栽培されています。中でも山間部の粘土質のほ場は「長狭米」の中心的な産地として知られています。

農地利用

（農林業センサス）

	田	畑	合計
農地面積（平成27年）	2,300ha	632ha	2,932ha
経営耕地面積（平成27年）	1,234ha	91ha	1,325ha

【長狭米の話】

古くから安房郡下は良質米の産地として知られています、特に加茂川流域の「長狭米」は食味が良く、遠くは大阪市場まで、鮭米として出荷され。粘土質に富む土質、温和な気候により、弘化二年（1854）の江戸地回りの米の格付けでは「上の上」にランクされるなど、すでにこの頃から光沢、風味ともに抜群の良質米として宮中にも知られていました。その後、明治天皇が即位後、明治4年に大嘗祭を行うにあたり、古事にのっとり宮中で亀甲を焼き、罎（ひび）の方角の土地に「悠紀（ゆき）」と「主基（すき）」の二か所を斎田と勅定し、新穀を献上させることとなり、当時の安房国長狭郡北小町村が名誉ある主基斎田（主基田に供える新穀の収穫地）と決まりました。

◇花 き

温暖な気候条件を活かした特色ある生産が展開され、西条・鴨川地区のバラ栽培、江見・曾呂地区の鉄砲ゆり、スカシユリ、カーネーションなどの栽培が盛んで県下でも有数の切花産地を形成しています。

中でも、太平洋に面した「江見地区」は、古くから花き栽培が盛んで、鴨川市の基幹作物の一つとして、地域経済の発展を支えてきました。

◇野 菜

野菜栽培については、施設栽培であるトマト、きゅうり、いちごを中心に、露地栽培ではレタス、そらまめ、食用ナバナ、枝豆が中心に栽培されており本市の重要な農産物になっています。

◇果 樹

果樹は、温暖な気候を利用して温州みかん、夏みかん、甘夏などのかんきつ類が主に栽培されています。

温州みかんは戦後の国の政策の影響を受けて、栽培が始まったものが多く、現存する古い樹では30年以上経過するものもあります。販売は直売や観光摘み取りがほとんどであり、品種は10月上旬の極早生から始まって晩生の青島の年末まで収穫が続きます。

夏みかん、甘夏などの中・晩生かんきつ類は県内でも鴨川市は栽培面積の多い地域で、年明けから初夏まで収穫されています。また、一部ではゆずやレモン等の香酸かんきつ類も栽培されています。

近年ではブルーベリーやイチジクなど、収穫までの年数が短くてすむ果樹の栽培が定年帰農者等を中心に増え始めています。また、少数ではありますが多様な消費者の嗜好の影響を受けて熱帯果樹のドラゴンフルーツ、パッションフルーツ、フェイジョアなど珍しい果物も直売所に並ぶようになりました。

平成 26 年度種類別共選販売実績

(単位：千円)

種 別	販 売 金 額	種 別	販 売 金 額
たけのこ（破竹）	55	いんげん	8,531
野ぶき	1,694	甘長とうがらし	2,936
その他露類	230	スナップエンドウ	5,828
レタス	2,241	そらまめ	4,758
パセリ	3,127	えだまめ	872
なばな類	14,781	いちご（とちおとめ）	17,535
トマト	41,757	レモン	167
ししとうがらし	6,980	その他	7,228
にがうり	1,506	合 計	120,226

◇畜産

畜産は、酪農を中心に発展し、古くは戦国時代里見氏の馬牧であった嶺岡牧（安房郡丸山町）が江戸時代に入り幕府直轄の牧となり、軍馬の供給の場として馬の改良と共に、8代将軍徳川吉宗がインド産白牛による酪農を初めて行ったことから、我が国の酪農発祥の地として嶺岡牧を中心に安房地方の酪農発展の基礎となりました。

明治にはいり官営になった嶺岡牧でしたが、その後も日本初の練乳工場の建設（鴨川市大山地区）や牛馬共進会（吉尾地区）などの開催もあり県内はもとより全国でも有数の酪農地帯となっていました。

市内農家の多くは半農半畜での経営が多かったが、その後の乳牛資質の向上を目指した品種改良により一頭当たりの搾乳量増加に伴い、農家の畜産経営への一本化など経営構造の変化により一戸当たりの飼養頭数の増加、飼養農家戸数の減少が進みました。

ここ数年は、乳価の低迷、飼料の高騰による収益性の低下などの要因により多頭化が更に進んでいると共に、高齢化や後継者不足に伴い離農も加速度的に進んでいます。

畜産経営が環境に及ぼす影響も大きくなり、地域社会との連携のもと資源循環型社会の構築が求められています。

家畜飼養農家数及び頭数

（単位：戸・頭）

	乳用牛		肉用牛		合計	
	農家数	頭数	農家数	頭数	農家数	頭数
平成23年	38	1,420	13	762	51	2,182
平成25年	32	1,395	9	559	41	1,954
平成26年	30	1,287	9	472	39	1,759
平成27年	32	1,268	9	514	41	1,782

【野菜づくりは土づくり～牛ふん堆肥の使い方～】

堆肥とは、単に栄養分の補給としての役割だけでなく、土壌を団粒化させ、通気性・排水性や肥料保持力を向上させる効果があります。さらに、特定の微生物だけが増加することを防ぎ、病気にかかりにくい環境を作ります。

堆肥は、なるべく完熟させたものを施用しましょう。

未熟な堆肥は病害虫や雑草が発生する原因となり、植物に有害なガスが発生することもあります。完熟させた堆肥は、発酵の過程でこれらの要因を取り除くことができます。

完熟した牛ふん堆肥は、作付けの1ヶ月以上前に施用しましょう。窒素分の流出を防ぐため、できれば石灰などの土壌改良資材は別々に施しましょう。

◇林業

森林面積	11,924ha（市全体面積の62%）
人工林	5,278ha（44%）
天然林	5,793ha（49%）
竹林等	851ha（7%）

鴨川市は、房総半島の南部に位置することから、温暖多雨、冬暖夏涼の海洋性の気候を呈しているため、樹木の生育に適しています。

近年の林業を取り巻く環境は、木材価格の低迷、輸入材の進出、林業経営者の高齢化と後継者不足等は依然にもまして厳しく、林産生産活動が全般的に停滞し、間伐、保育等が適切に実施されていない森林が増加している状況にあります。

このようなことから、零細所有構造と相まって備蓄的保有の傾向が強くなり、林業経営意欲は益々低下していることから、若年労働力の確保は厳しい現状です。

しかしながら、自然環境の保全に対する森林の重要性等を勘案すると、保健文化機能や水源涵養機能などの公益的機能が十分に発揮できる継続的な森林整備が必要となっており、また、ここ数年の、有害鳥獣による森林被害やシカ・サル等により媒介されるダニ・ヒルにより人的被害も生じているため、農家や林家が安心して森林施業できる環境整備、地域で安心して里山を利用できる対策を図る必要があります。

この様な中、森林組合では、所有者の同意をまとめ、集約化された施業を推進して、また一部地域では、所有する共有林を地元住民が積極的に管理するなど、精力的に森林整備を行う事例も増えてきています。今後も、国・県の補助事業の積極的な活用、また森林組合や地域の森林所有者、森林ボランティア団体等、地域住民との連携も含め、様々な施策による森林整備が必要となっています。

【鴨川里山を守る会（森林ボランティア）】

鴨川市では、森林所有者の高齢化や人手不足等から荒廃の危機に瀕していることから、自主的な奉仕活動として、森林の保全・整備に参加していただける方を募集しています。作業は月に一回、植林、下刈り、枝打ち、間伐等を行い、実践を交えた知識の習得の場として参加しています。

移住された方も多く参加しており、コミュニケーションも広がります。

募集時期：随時

会費：2,000円

注意：山仕事は危険な作業です、事故や怪我に備え最低限の保険には加入しますが、事故等への対応は各自の責任で参加して下さい。

・・・・・・詳しくは、鴨川市農林水産課農林振興係

TEL 04-7093-7834 FAX 04-7093-7856